

山とスキー

□□□□□□□□□□□□□□□□

第二十九號

札幌山とスキーの會發行

大正十二年九月一日發行

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
大正十二年八月三十日印刷納本

次目號九十二第



記 事

詩

ベルグシュタイガーの手帳より

大 島 亮 吉 (一)

立山と白山との脊較べ

六 鹿 一 彦 (二)

議會にあらはれた國立公園問題

加 納 一 郎 (三)

スキーの研究について

岡 村 源 太 郎 (七)

彙 報 抄 録

雪崩發生時期及び時間に關する一報告

山 頂 の 霧

會 告

寫 眞

レルへの影

酒 井 嘉 七 (五)

日と雲と

蒼空 映る山の湖。

憩ひの日あり 丘のへの
森の彼方の神の國。

靜かなる

胸にも覺ゆ憩ひの日

惱みなき 心をよぎり

崇き愉悅の想あり。

— ウイルヘルム・スタインコツプ —

ベルグシユタイガーの手帳から

大 島 亮 吉 譯

*

Bergsteiger—Kraftproben?

Nein:—Die besten unter ihnen sind

Sittlichliche Menschen!

*

Ians Morgenhaler (Ihr Berge)

眞の mountaineer とは、またある意味に於て一個の Wanderer でなければならぬ。然し私はこの Wanderer を以て、恰かも英國の踏みならされ、固められた坦々たる街路を疾驅してゆくビシクリストの様に、山々をたゞその先蹤者の足痕のみを趁ふてさまよひ歩く様な Wanderer を意味したのではない。それは未だ人間の足痕の到らぬ、高き、清淨な雪を愛し求め、また人間の温かき指先の觸感を知らぬ岩の一片を掴むその知感に言ひ知れぬ喜悅を覚え、或ひはまた、この大地が混沌のうちから築きあけられた時以來、絶えず雲霧と雪崩とに捧けられてあつた狭谷グレイの氷の暗影を踏んで、一步／＼それを刻み登ることに飽くまで倦まぬ歡喜を享感し得るやうな人を意味するのである。

それ故、更に言葉を換へて言へば、眞の mountaineer とは常に、絶えず新らしき登攀を求めつゝあるのである。またその成功すると否とを問はず、その山岳とのほけしき争闘に限りなき悦びを得得するのである。故に風雪に削磨したかの鋭いリツヂの滑らかな *エッジ* や狭谷の外へ張り出た様に急峻な蒼黒い氷の面、そしてまた正しく刻まれた雪面のけはしいステップなきは、全く此等の人々にとつては生命の眞の氣息なのである。A. F. Mummery

(My Climbs in the Alps and Caucasus)

*

たゞ峻しく、徑なき岩を登攀することのみ歡喜をもち得るものにまつては、山岳の莊嚴、華麗な觀照は全く無感覺にも等しい。然してこの感情の二方面をよく結合せしむることは困難なことである。クライミングの壯快さを愛するものは山岳の景觀を輕視し、山岳の景觀を好むものはクライミングを嫌ふ様になるのである。

然し乍ら山岳に對して最も魅力を感じて、絶えずその巨きな手に抱擁さるゝべく、その山懐に歸りゆくものは、その極限までこれらの悅樂の兩資源を有つものであり、また夕映の天空に連互して輝く偉大な山岳の色彩と形態とそしてその調和との齎す、言ひ表し難き歡喜と、このたぐひなきスポーツの愉快さと *エッジ* とを結びつけ得るものは最も幸福なのである。私は譬へ其處に最早何等、私の視覺に訴ふるに足る程の類らたなる景觀が得られなくとも、また苦しみ登攀して得達せらるゝものがたゞヨークシャーの岩谷の暗い、怪奇な甌穴のみであらうとも、尙私は自ら其處へ登らねばならぬのだと言ふことを敢へて言ひ得るのである。そしてまたその他方に於ては、私は譬へ私に如何なる肉体的の老衰退歩や其他の缺陷が生じ様と、或ひはまた私の肩から翼が生えるやうな、其他のいかなる奇蹟的變化が、生じて、全く私のクライミングに對する想ひも *Cragsmanship* も、それがすべてを覆ふ過去の領域のうちに消え去らうとも、尙私は沈みゆく太陽の赤き火焰のやうな輝きと、沈黙した霧の冷たき手が誘引のまゝに、高き峯々の雪を追ふてさまよひ歩こうと思つてゐるのである。

A. F. Mummery

(My Climbs in the Alps and Caucasus)

大空にそゞり立つ巨大な岩壁と沈黙した廣大な雪原によりて齎せらるゝ independence と self-confidence の感覺は、常に吾等にとつては限りなき爽快さを與へるものである。刻みゆくステツプの一つ／＼が吾等の health であり、firm であり、fohie である。人生の困苦、心勞、煩瑣のすべては、皆 phisocative な社會に必然な卑俗淺薄と共に、雲霧の湧き立つ谷々の底に沈澱した汚れたその空氣と同じく遙かに吾等の脚下に置き残されてしまつてある。仰ぎ見る上は、たゞ澄明透徹な無窮の大空と輝き充ち溢れる太陽の光りのみである。その洋々とした自由な、偉大な感覺！まことに吾等はたゞ平和な神々と共に歩みつゝある様である。そして吾等はいま相互を知り、自らを知るのである。「吾等人類の基礎者の如く固く結びついた友」と共に、あるけはしくそゞり立つた岩壁に向つて振り廻る瞬間の感じほど誇らしきものはない。また僅か片手の五本の指先にも、なほパーティのすべての生命が托されてあることを知り、また外側に張り出た様になつた急なレッヂにわづかひとつの靴釘の摩擦に依つてわが身体が空間に投げ出されるのが支へられてあるうとも、下肢は全く「膝のガタつく様な恐怖」を何等感ぜず、たゞ吾等の精神が遙か頭上の王國に向つてのみ燃えつゝあることを想ふ時ほど悦ばしきものはない。

A. F. Mummery

(My Climbs in the Alps and Caucasus)

*

運命の神はマウンテンニアをして早晩は furor scribendi の犠牲とならねばならぬものだと定めた。そして私は單なる人間が、神と争ふことの不可能なることを知つた故に、たゞその命令に服したのであつた。然しまたそれと同時にその充分なる對償は私にまで配與されたのである。そして譬へ廣大な、高き雪原のうちをさまよひ、鋭い鋸齒狀のレッヂを登攀しまたは高架索のある谷の廣大な原始林をさすらふ悦びと雖も、笑ひと怖れと懸命な争闘と、その勝利の荒々しき勝鬨の交

織が、數多き冬の夕べ、その榮あるアルプスの日没に彩られ、固く結ばれし友情の纏つなにより固く編まれた私の懐しいそのうちに建てられた貴重な *Emile* に比することは出来ないのである。

洵に偉大なる山岳は時にはある犠牲を要求することがある。然しマウンテニアールは、譬へ彼自身が必ずその犠牲となるべく運命づけられてあることを知つてゐるやうとも、尙彼自身の信仰のためには敢へて進んでそれへ登ることをなすだらう。けれども幸ひにして、吾等の多くは、無窮な空間にそゞり立つ巨大な岩壁、風が作つた雪庇コウニスのラインやカーヴ、積れる雪のデリケートな波及に對しては古き、そして最も信頼されたる友であり、そして絶えずそれ等のものに依つて吾等は吾等の *Health* と、*Fun* と、そして *Laughter* とに誘はれ、時と人生の壓するすべての害惡に對して吾等をして常に強き反抗をば試み得させて呉れるのである。

A. F. Mummery

(My Climbs in the Alps and Caucasus)

*

マンマリー氏の大著 *My Climbs in the Alps and Caucasus* は今日では既にひとつのクラシックなものとなつてしまつてゐるが、それは *Grepon*, *Requin*, *Zmunt* のアレントよりのマツターホルン並びに高架索の巨人 *Gyvel Tau* 其他舉ぐべき重要な多くの新らしい *expedition* の記録を有してゐて、マウンテニヤリングに對しての近代的な見解の最もピカルなものである。氏はたしかに登山界に於ての一種の異端者であつた。例へば氏の主張した説のうちで *suicides climbing* や *difficult variation route* の説の如きは今日に於てはマウンテニアールのうちではどゞ承認されてはゐるけれど、尙雪に蔽はれた氷河上に於て二人よりなるパーティーの安全なることを主張した説の如きは最も異端的のものと見做されてゐる。氏はこの著を表明はしてより間もなく、氏自らの言へる如くヒマラヤの *Nanga Parbat* に於て悲惨な死を遂げて眞實山岳の犠牲として氏自身を捧げたのである。

Arnold Lunn (The Alps)

*

全然山岳に就て何も知る處なく、また唯美食のみをして何等勞することなくして登山の氣分を味ひたいと望むものに對して、皮肉家の例の Mark Twain は親切にも、最も適切な登山の處方箋をそれらの人々に書いてやつてゐる。

曰く、「ホテルのヴェランダ！ ウィスキーの壺！ 望遠鏡！」

*

總て他のスポーツに於ては、その褒賞はたゞ優勝者のみ歸するのである。然し山岳は恩恵を與へる點に於ては他のスポーツに於てより、より寛大な態度を有つてゐるのである。故に譬へ山岳はその最も勇ましい愛好者に對しては、それがマウンテニアに與へる至上のものを保持して置くことは言へ、尙ほ然かも、其處にはまだ吾等のごときものに對しても、
“No high hill which doth not contain in it some most sweet memory of worthy matters” と古き旅人の言葉にあるが如きものが残されてあるのである。

Arnold Lunn (Skiing)

*

アルピニズムの最高の發達は *skillful climbing* に到つて始めて達せられたのである。アルピニストの理想は正に、何等の職業的な援助を俟たずして最も困難なクライミングをなし得る程度に、そのクラフトの知識と熟練とを到達せしめてこのスポーツの眞味を完全に味はんとすることである。

親しき山友達と共に、特に人間的な雰圍氣の稀薄なアルプスの谷々を求めつゝ、それを追ふて自由にさまよひ歩き、蒼空にそよりたつ大きな岩壁と組打つを愛し、硬い蒼水の急谷に長時間の、烈しいその闘ひをたのしみつゝ、最も印象的な愉快な休日費し得るものこそ、マウンテニアのうちで最も幸福なものなのである。

G. D. Abraham

(Complete Mountaineer)

*

吾等マウンテンニアーは何故に斯くアルプスを愛するのであろうか。それはそれが有つその形態の莊美にあるのであろうか。或ひは、時として危険を伴ふその登攀の困苦との争闘に依つて與へらるゝ純なる肉體的の歡喜に、それは原因するのであろうか。或ひはまた、それはこの山々のみの至高の王國への關門を護る氷と岩との墻壁を打ち越えて、其處に安全な道を見出すべく吾等の機智クワイットを置かしめるその精神的な歡喜に因るのであろうか。

またそれは黎明のそのミステイックな指先に依つてなされる雪、岩、空のその色彩と調子との壯麗なシンフォニーが、吾等に訴へるその視覺の特異な快感に因るのであろうか。

それは群畜を壓して高聳する峻峯のその尖頂に立ちて、吾等の周圍に新らしく擴がれる、廣き地平線の觀想の不可思議な、刺戟的なその精神の向上に依るのであろうか。或ひはそれは、同じ一條のロープによつて長い時間を結ぶその Comrade-ship に依つて、吾等とその友との間を固く結ぶ、その同情と信賴と友情との人間と人間の連鎖であるのであろうか。

すべてこれ等の、まだ他にある數多くの理由に對して、アルプスは單なる言語に依つて言ひ表はさるべく、餘りに微妙にマウンテンニアーの心にまで親はしいものである。

Harold Raeburn

(Mountaineeringart の跋詞より)

立山と白山との背較べ

六 鹿 一 彦

立山雄山神社の前に立つて、周圍の自然の雄大な展望に恍惚として居た意識を漸く取り戻してフト足下を見るに、拳大の丸石が一面に敷かれてあるのに氣がつく。川原の石が此んな所にどうして……と一寸不審の首を傾けたが、直心中に一昨日小黒部川の川原で休憩中に、案内の助七が話した事を思ひ出した。そしてルツクサツクを開いて、今まで忘れて居た石山への献上物、それは今不審の首を傾けさせた足下の石と同じ様な丸い、滑つこい小石を取り出して高そくな岩の上に乗せつゝ、遙の西に聳える白山の頂を眺めやつた。

助七の話は斯うだつた。

「昔、おらが國の立山と、加賀の白山とが背較べをしたそ

うな。そんな時に、立山の方が馬の脊だけ低かつたので、おらが國の衆が立山へ參る時あ誰でも石を持つて立山の背を高くするだ」

しかも越中の若衆たちは、必ず一度立山參拜をしなければ若衆仲間に入れないと云ふ。此の多數の越中からの參拜者が持ち登る小石が積まれて遂には白山を眼下に見下し得る高さに達せしめ様と云ふのである。此の小石がつもりつもつて雄山神社の社前に集められ、周圍の火山岩著しい對稱をなして登山者に奇異の思を懐かしめるのである。

高山背較べの傳説や、籠から運んだ石で山の高さを増えうとする企の傳説は、山岳傳説では最普通一般の型であつて、決して珍らしいものではない。類似した高度の山岳が

二つ以上存在する時には最普通に生ずるものである。しかし立山と白山との場合に於ては、一種の愛郷心に基く敵愾心から發した高度の争ひである。日本三靈山と稱せられる高山の二つが、極近距離に對待して聳える時に、しかも一方は越中の國に、他方は加賀の國に於て相對する時には俺の方が、なに俺の方が、山の高さを争ふに至るは當然の事である。富山の原野を間に狭んで兩山が眺み合ふ時、測量の技術が進歩しなかつた昔に於ては、全く無限の争論が起り得可きである。そして此の争が結局、馬の沓だけ立山が低いと云ふ決定を得たのには、相當の理由があらねばならぬまい。

此んな大争論を起した兩山の高度は實際に於て幾何あるのだらう。陸地測量部の地圖を開いて見ると、立山の最高測點たる大汝山が三〇一〇米突で、白山の最高測點たる御前峰は二七〇二米突に過ぎない。其間の差は實に三〇八米突であつて、普通に考へれば、決して此んな争が起りそうには思はれない。現に、立山附近に存在する多くの日本アルプスの連嶺は、悉く立山よりも低く見られて居る。又事實に於て槍ヶ岳、穂高岳を除けば立山よりは低いのである。だが、白山と比較すれば何れも高く、立山と相匹敵する高度を持つて居る。然るに白山のみが立山と比較され、そして高度の差が辨別されなかつたのにはどんな理由があるの

だらう。

第一に考へ得るのは、心理的の誤謬である、先づそれには、白山は高いと云ふ先入の暗示的觀念である。富士、立山、白山と三山が併稱されて、白山は日本に於ける高山であると云ふ強い暗示である。その次には登路の困難の度、其の距離が正確な高度に對する測定を不可能にして居る點である。白山と立山との登路を比較すれば、何れが平易であるとは云へない。之が低い白山に登つて尙且立山以上の高山と思惟せしめた理由である。又白山が其の名の起つた如く極めて多量の白雪を夏にまで殘留する爲、著しく高い山の如く思はしめるのに依る。殊に立山の頂上に立つて白山の雪を眺め、次に自分の周圍の雪を眺めると、白山の雪の量が著しく多いのに氣附くであらう。そして此の點から推察して、白山は立山より雪が多いから高いのぢやないかと云ふ考が浮ぶのである。此の雪の量に就いては一寸面白い原因がある。白山のみならず、日本アルプス連嶺は南北に走る山脈である。そして風は冬季北西から吹くので山上の雪は風上の東側へ吹き寄せられる。それで冬の積雪量から見ても東側の方が多し釋である。夏になつて日光の照射が強くなり雪が融ける様になると、午前よりも午後の方が融雪量が多いのであるが此の午後には日光の照射の多いのは元來積雪量の少い西側である。爲に日本アルプスにては夏

期の残雪は東側に於て著しく多く、長大なる雪溪や雪田、は皆東側にある。白山も亦之と同様で立山からは其の雪の多い東側を眺めるので、立山及び日本アルプスは其の西側を眺める事となるのである。其れが爲に白山の雪が著しく立山の周囲より多く見えて、白山の高度を高く思ひ込む様になるのである。

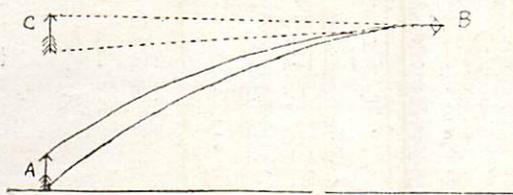
第二に考へらるゝ事は視覺の誤謬である。先づ其れには白山が周囲に高山を有せず孤立せる事が數へられる。此れは迷視とは云へない。謂はゞ心理的のもので、誤つた觀念を構成するのであるが、立山の如く比較すべき山岳のない爲高度が全然觀測者の獨斷に出づる事によつて前述の白山は日本三山のひと云ふ先入觀念の活動を助けるのである。次に擧げる理由は、此の一文で特に私が皆様の注意を惹かうとする點であつて、其の爲に私が此の愚文を捏ねあける理由である。

其れは完成な迷視である、立派な錯覺であつて光學的説明を與へ得るものである。

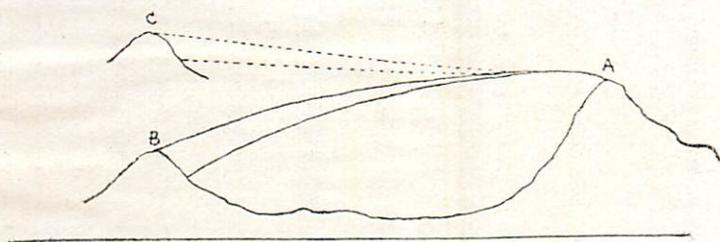
光線は皆様も御承知の通り密度の大なる空氣層から小さな空氣層へ入る時には屈折率の差によつて屈曲するものである。密度の大なる空氣層の方が屈折率が大であつて第一圖の如く光線は彎曲した徑路を通るものである。圖に於て下部の空氣層は上部よりも漸次密度が大となれるものとす

る。此の場合、私等の眼に感ずる光源の位地はAではなくてCである。即ち實際の光源の位地よりも餘程高い位地に感ずるのである。上部の空氣層の密度が下層よりも小なる時には全く之と反對である。今白山と立山との場合を考へて見るに、此の兩山の間には富山の平原が存在し、他に大なる高山はなく、山と云ふものは極めて低い丘陵性の低山に過ぎない。今此の兩山の中心を通る線によつての斷面を考へて見、此の場合の氣壓の配置を眺めて見やう。理論的に云へば、氣壓は海面よりの高さに依つて減少するので氣温二十度（攝氏）に於ては一一。四米突毎に一耗減少するのである。そして山岳や谿谷の存在は何等此の等壓線の高さに影響せず、等壓線は海面から等距離の同心曲線なるのである。此の理論の場合に於て白山と立山と兩山の間の高度の錯覺に就いて考へて見度い。

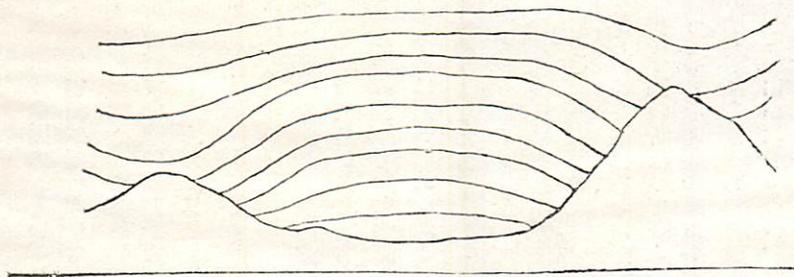
第二圖は前述の兩山と空氣の密度に依る光線の屈曲との關係であつて大いに誇張したものである。今立山の頂に立つ觀測者Aが白山の頂を見る時には、光線は直線の徑路をとらず、曲線を畫く事は光線の性質上當然である。其結果觀測者Aの眼に入る白山Bの位置はCの如き高所になるであらう。之が白山の高度を見誤つた理由の重大な點である勿論、白山のみならず眞の周囲の山も平地も實際よりは高められて見えるのであるが、平地に於て高度を觀測するの



第一圖



第二圖



第三圖

に慣らされた眼（寧ろ脳神經中樞と云つた方が正しいだらう）は自分の眼の水平線上又は其れ以上に持ち來たされた對稱物を、自分と同じ高度又は以上に見る事は必然的結果である。斯くして三〇八米突も低い白山が立山と高度に於て見誤られるのである。飛行機や輕氣球に乗つて遙か沖空高く昇騰すると、眼界は次第に廣まつて、汽船の甲板上からの視界の約六海里とは甚しく異つた廣大な視界を得る事となる。然るに、其の遠方に至る程、高く盛れ上つて來て恰かも盃の中に入つた蠅の如き思をすると云ふ事を聞くが、之は全く前述の空氣層の密度の變化に依るのである。

實際の等壓線（寧ろ等壓面と稱する方が適當だが、今は斷面圖を考へての話だから線と云ふ）は第二圖のものと異つて居るのは勿論である。其の變形した等壓線の配置が又山の高度を誤らすのには甚好都合なものである事は興味のある點である。山に接した部分の空氣は晝間山腹の土地が暖められる爲に温められて膨脹し、空氣の密度は小となつて來る。然るに理論的等壓線の山に接しない部分は變化を受けず、等壓線は山に接した部分で下り、中間部が上つて山形を呈する事第三圖の如くなる。此の氣壓の配置に於ては觀測者と觀測物との間に高低の差がなくとも觀測物は實際の高度よりも高く觀察される。従つて立山から白山を見た時の如きは第二圖の場合以上に高く眺められるのであ

る。右の現象は特に立山と白山との間に著しい。此の兩山の間には高山がないので中間の空氣が暖められる事がない爲に山に接する空氣よりも密度が大となつて等壓線の傾斜が大きくなり、従つて錯覺を來す光線の屈曲が大となる。然るに立山から槍ヶ岳や白馬岳を望んだ時には氣壓の關係が中間の山に依つて亂れるのであまり著しい錯覺が現れないのである。

以上の原因の他に、古來立山登山者の數の方が白山登山者の數よりも多く、特に他國の住民が立山講等を作つて白山よりも多く立山に登つた事によつて、白山の高度の錯覺が兩山の背較べをなさしめるに至つたのであらう。加賀の住民と越中の住民とが相會すれば必ず各自の「お山」を自慢し合ふ、そして結局どちらが高いかと云つて争ふ事となる。兩國人の争は何時まで經つても我田引水で終了する事はない。山に登つた事のある兩國人は各自共、自分の山の方が低くはないか知らんと云ふ心配はありながらも、表面だけほどきまでも自分の山が高いと云つて譲らない。然し其處へ立山へ登つて兩山の高さを實際に眺めて來た他國人が入つて來るに、争論は終結する。そして他國人の第三者が錯覺によつて得た智識で「白山は仲々高い、立山以上かも知れん」と云ふので納つてしまふ。其處へ又白山へ登つ

他國人が来て「立山の方がずっと高い。白山は眼下に見下されて居る」云へば、争論は蒸し直しになるのだが、世上で立山へ登る他國人の方が白山へ登る他國人よりも多い爲に、白山は從來買ひ被られて居たのである。即ち立山が白山よりも馬の杓だけ低い云ふのは、立山から白山を眺めて兩山を比較した時の結果であつて、白山から立山を眺めたら、此の問題は起らないだらう。

雄大そのものの具体化とも云ふべき眺望を持つ立山山頂



に立つて、西方遙かに紫烟の中に霞む白山を眺めた事のあ
る人は、彼の二七〇二米突の彪大なる残雪に飾られた山頂
が悠然として沖空にそより立つて居るのを見た時、恰も立
山を上から壓するが如く高く聳立するのを感じたであらう
實際白山は高い。立山と比較してどうか。ミ思ふ位
高い。一切の誤つた先入觀念を棄てしまつて、虚心平氣
で眺めても矢張り高い。立山と白山との背較べの話も無理
はないと思はざるを得ない。

議會にあらはれた國立公園問題

加 納 一 郎

第四十六議會には國立公園設置に關する建議案が二十一請願が六つあつた。近時本邦に於ける國立公園問題も漸次具体化して來た。此は吾々にとつてはまことに結構なことである。若し夫等が公正な調査と、冷靜な批判とを以て、區々たる地方的關係（主として行政的關係）を超えて決定せらるるならば、而し單なる人間の經濟政策にのみ基いて定めらるゝならば、そはまたあまりに悲しむべき事柄である。せちがらい世の中である。自然景勝を喰物にして生きよふさへする人間が多いときである。吾人は此の問題について營利本位に累せられざらん事を切に願ふものである。さて前記二十一箇の建議箇所を示せば

霧島山

吉野連山を主とするもの

日光附近

盤梯山猪苗代湖を中心とするもの

富士山を中心とするもの

上高地

筑波山

國立公園促進に關するもの

立山連峯を中心とするもの

富士箱根連山一体

養老

京都市を中心とするもの

河内金剛山

鹿野山

嚴島を中心とするもの

阿蘇山

和歌浦を中心とするもの

琵琶湖を中心とするもの

仙臺、鹽釜、松島、石巻、金華山を包擁するもの

支笏湖及び俱多樂湖を中心とするもの

定山溪（北海道）

以上のうち後の二者を除くの他は衆議院に於て可決せられた。一見噴飯に價するものも尠くない。未だに縣人會だの同縣人だのと云ふ觀念の抜けない日本人である。井蛙の如き愛郷心とやらに基いたものが多い。國立公園は人間の爲のみではなく、自然それ自身の爲にもよりよく考慮せられねばならないものである。國立公園に於ては自然を破壊する行爲を最もをせなければならぬのである。鐵道を附設し道路を改良すればいゝ様な考から出發してゐるものは全て破棄すべきである。

以上列記せるものうち直接吾々に關係ある地點のものに就て提出者の本會議に於ける説明を摘録して見よう。

奈良縣吉野郡を中心とする國立公園の建議案に就て二月

八日提出者岩本平藏氏説明の一部掲を出すれば「奈良縣の南部より和歌山縣にかけ三重縣にまで恒つた所の此の一大山岳、約二十里三十里位の間を之を一つの公園に致したいと云ふ大体の建議なのであります。此の區域は紀伊山脈とも申しまするし吉野群山とも申し、大和連峯とも云つて居るのであります。近頃は之を「大和アルプス」さも云ふのであります。此の山脈の背景をなすものを熊野の方から段々申しますならば吉野山に到るところの連山で最も著明なるものを上げますれば先づ那智より初め玉置山、地藏ヶ岳笠捨、大日岳、釋迦岳、佛生岳、明星岳、孔雀岳、八經岳彌山、普賢、彌勒、七曜、山上斯ういふ風なあの即ち「大和アルプス」全体を唱ふるのであります。併しながら今日「大和アルプス」と申しまして、又「日本アルプス」と申しまして本當の實際の歐洲アルプスには全く及ばない事は勿論であります。是はやはり中世代の前半に於て其當初には矢張此の世界的アルプスのやうな山であつた事は想像し得らるゝこゝはそれぞれ學者の言つて居る所であります」と云ひ更に進んで高山植物並びに森林につき又動物につきその特有なる點を力説してゐる。

又磐梯山猪苗代湖を中心とするものにつき提出者八田宗吾氏が二月二十二日の本會議で説明せるものを見るに、「單に春夏秋に於ける風光の絶佳を以て賞讃せらるゝのみなら

ず冬季に於きまして「スキー」が非常に流行を極めまして内外人が磐梯山、吾妻山斯様な方面に相會して「スキー」を現に盛に行ひつゝあるのであります。春秋夏冬を通じて遊覽地として内外人が來つて此に風光を探ると云ふことには最も好適地である。私は信ずるものであります。其の附近に於ける温泉の數は數ふるにたえず試に之を擧げて申しますれば中の澤温泉、沼尻温泉、横向温泉、川上温泉、磐梯温泉、上の湯、中の湯、押立温泉等はいずれも相隣接してそして天然の温かい水を湧出しつゝあるのであります。「スキー」を以て遊んでそして後一浴を試みて楽しむことは冬季の場合に於ても好適地でありますから此點を御紹介申し上げて置きたいと思ひます。」と。

次に日本アルプス山中上高地（神河内）に國立公園を設定するの建議案提出者塚原嘉藤治氏の説明を述べれば先づ同地域位置の説明をなし「斯ういふ様な廣い高原が而も一萬尺以上の山六つ七つに圍まれて居る所の高原と云ふものは歐羅巴のあの「アルプス」の中にも嘗て無い所ださうであります。——此間岩本君が大和アルプスの説明をされたときに歐羅巴のアルプスと日本のアルプスや「大和アルプス」と較べて見ても「日本アルプス」や「大和アルプス」は迎も歐羅巴のアルプスに及ばないとか云ふ様なことを云はれておつたのであります。併しながら此は間違であります。

して。……」云ひ、ウエストン氏の業蹟、ヘットナースタイン等につきて説き、氣流、生棲動物、湖沼につき言及し之を國立公園となして必要な設備を施して登山を容易にし之を奨勵して國民剛健の氣風養成に資せんことを力説してゐる。

更に立山連峯を中心とする國立公園設置に關する建議案提出者たる廣瀬鎮之氏の説明を再記せば次の通りである。「諸君、近年頻に國立公園と云ふ聲が盛になりまして我國民の身心を養はんが爲に、最も時代的施設であらうと考へるのであります。私共は茲に立山彌陀ヶ原に於て新に最も適當なる新候補地を得ましたので茲に諸君に御紹介すると申すことは洵に喜ぶべき次第であらうと考へるのであります(拍手)立山の彌陀ヶ原と申します所は、廣柔六里許りある所でございまして、四千尺より八千尺に至る間の一大平原であります。其間には獅子ヶ鼻と稱名瀧、五色ヶ原其他非常なる面白い奇蹟があるのであります。最も公園として適當な所であらうと思ふのであります。殊に近年非常に「スキー」が流行致しますが此所が春夏秋冬「スキー」に適する所であります。四千尺より八千尺に到る曠原でありますから六月より四千尺の所に行きまして、八九月になると七千尺八千尺のところへ行きますと四時「スキー」の出来る所であります。斯の如く適當なる所は瑞西より外には

世界に於て類のない所であるさうであります。最も此節の運動と致しては適當なる「スキー」の箇所であると申すことでもあります。」と云ひ温泉、地獄谷を説き朝香宮の御登山を引用して説いてゐる。

以上説明は各一部を掲出したにすぎないが、提出者の着眼點を知り得ることと思ふ。スキーに對する設備の完全と云ふことは吾々の立場としては甚だのぞましい事ではあるが、一般に國立公園の設立に當つては、日本にはまだまだ外國を模放したやり方は難かしかるふと考へられる。其場かぎりの我利我利亡者が多いのだから。それは小屋の設備や何かにつては餘程考慮を費さねばならないのである。

爾余の建議箇所就ては山岳家、スキー家にあまり深い關係がないから略することとする。たゞ富士山に就ての岳麓一周鐵道等についてはすつと以前から論議せられてゐる所であるが此等については他日にゆづり、此處にはたゞ上記主要のものゝ概要を示して讀者諸兄の參考に供した次第である。

(三三・七二七)

スキーの研究について

岡村源太郎

スキーといふものが眼につくやうになつてから、こゝに十年餘り、スキーは少からざる進歩を爲したことを認め得るであらう。初めの間は極く徴々たるものであつたかも知れぬが、近年殊にこの最近二三年といふものは、驚くべき勢を以て全般の人々の間にスキーが行渡つて來た。そしてその各一人々について見ても、スキーに對する熱心の程度の大になつた事、練習法の所謂改良等によつて、技術も全く見ちがへるやうになつて、益々スキー術の蘊奥に突き進んで行きさうに見える。唯こゝに遺憾とするのは、冬の日の餘りに短くて、スキー登山に對しては大したことはないが、一般スキー家に對して雪質の變化の極めて速かに襲來して、快走の期間の非常に短いことである。然しながらこの長い雪無き日といふものは、我々に對してより長いスキーの準備時期を與へて呉れるものであつて、之が爲に我

々は充分に、ゆつくりと冬の活動の爲のスキーの研究を爲すべきではなからうか。

即ち眞のスキーランナーの任務は眞面目なる四季を通じてのスキーの研究である。スキーが遊蕩氣分に入らざしつゝありとか稱せられやうとして居る今日、最も廣い意味のスキー研究は、實に我々が最善の努力を盡すべき事である。とはいふものゝ過ぐる跡を顧みても、そこに少からざる先人の努力は見出し得るのであるが、之も或限られたる部分にのみ止まつて居るのではないかといふ感を深くせしめられるのである。もつとスキー全般に亘つて、各人の力を欲することは極めて大であつて、漫然と取り残されて行きさうに見える部分の少くないのが眼に映るのは、實に心苦しい次第である。スキーのより好き發達の爲に全力を盡さるゝ人々のスキーこそ、眞に價値つけられたものである。

之によつて、スキーが北國に於てのみならず、雪なき國に於ても、立派な他の運動競技と比して何學遜色なきものと認めらるゝやうになつたならば、我々スキーヤーの喜びは之に越した事はあるまい。

我々が一層深く、且つ廣い範圍に亘つて研究しやうとする時には、スキーのみならず他のスポーツにせよ同じ事であるが、そこに研究問題のより細く分れて行くと云ふことは當然のことである。そして各人がその分化せられた小問題を究めて行く時に、行きつまつたスキーの前途等こいふ事は、全然考へにも及ばぬ所なることを知るであらう。既に我々スキーヤーの向ふ所が、一般に異つたグループに進み、所謂スキーの専門化が殆ど行はれやうとして居るやうに、この場合のスキー研究も大体その方向によつて組分けし得るものと思ふ。即ち

一、ジャンプ

二、競走

三、スウイング

四、登山

この四つは必ずしも各人がその一方向にのみ進むものと限られたることはなく、一人で好く以上の四方面に秀でた技術を有して居る人も居り、殊にスウイング等は苟もスキーに身を入れた人が、殆ど例外無しに或程度まではよくし

得る所である。然し研究するとなるに、そうくジャンプも競走をも等といふ風に、深く考へやうとすることは困難であらう。勿論ジャンプ等こいふても、更に深く見る時は更に之が細かな項目に分れて行くのであるが、スキー現在の状態では、以上の四方向を主なものとして、大なる誤り無しと信ずるのである。以下この四つについて、私の小なる經驗から氣の付いた所を記して見ようと思ふ。

ジャンプの研究、之はジャンパーにとつては、實に興味多い、大なる前途を有して居るものであつて、技術の理論的研究、練習によつての今後の發達は、我々が最も注意すべき所のものである。殊にこのジャンプは、日本のレコードが歐米のそれに比して半分にも足りぬこいふ許りでなく實際を見て來た人でなくても、この他フオームに於て、或は設備に於て餘りに明かにその彼我の發達の高低を見せつけられて居る。ジャンプそれ自身に於ても、更にアブローチ、ザツツ等と微妙な技術の複雑なるコムビネーションに非常なる深さを有して居る事は勿論のここであるが、殊にこのジャンプでは、シヤンツエといふものが極めて重要な意義を有するものこなつて居る。他のスポーツに於けるグラウンドやコート等の比ではない。そしてそのシヤンツエ建造は極めて困難で、我々が外國に於けるものをまねるだけにでも非常な苦心が要る。更にこの時厄介なことには斜



レルへの影

酒井嘉七

面の長さ一〇〇米、傾斜三〇度以上といふ場所が得らるゝにしても、こゝに又、風向、日光、周囲の樹木の狀態、時として地質學上の考察をも挟まねばならない。

以上の如く、一寸飛ぶ位ならいくらでも出来るジャンプに満足して居るよりは、更に技術或は設備を理想的にすることの重要なのは當然の事であつて、之が爲にはより以上の苦心の決して無駄でないことは、一目して知り得らるゝ所であらう。

次に競走について見るに、之は今何とかスキー大會と云へば、大抵ジャンプはなくても競走だけはある程に廣く行はれて居るのに、この方面の研究といふものは非常に少い之は従來競走が選手の体力に餘りに密接の關係を持ち過ぎて居た爲でもあらうが、走る事だけならそんな未熟者でも出来るといふやうな考へが少からずスキーヤーの頭に入つて居て、平地滑走のやうなものが甚だ輕視せられて居た結果でなからうか。事實は全く之に反する。そこに研究せらるべき幾多の材料が、殆ど手を付けられずに残つて居る。

(山ゴスキーに現はれた文獻でも、小樽高商の高橋氏以外には、それらしいものは一つもない。)この競走には走り方即ち登り方、降り方、平地滑走等の技術的方面以外に、更に大なる問題が横たはつて居る。即ち之は競技の際にそのランナーに對して適用する規定其他である。何となればス

キー競走は、夏のランニング等から見たら猶一層非常に複雑なものであるからである。例へばコースに残されて居るスプールも降雪中の競走では、先頭の者に非常な苦しみを與へる。コース選定法は最も合理的に行はねばならぬ。スキー折損其他の事變の場合如何。應援者の行動について、即ちその選手補助行爲の範圍。之等の問題をすべきや否やは第二としても、誰しもスキー競走は決して簡単に輕々の内に行はるべきでないことを知るであらう。スキー競走を意義あらしめ、夏のランニングの如く立派な權威あるものとする爲に、今後の努力を切に欲する次第である。この道に秀でた人々の研究によつて、一日も早く我々が目的地に達したい。勿論スキーマラソンのレコードは、彼の國に劣ることジャンプ所ではない。

スウイング。之はジャンプを除けば、スキー術の最もアイゲントリツヒなるものである。ジャンプと結びつけて純粹のスキー術として取扱つてもよいが、便宜上之を放して考へるも餘り常規を逸したといふわけでもあるまい。之は直滑降を初めて知つた人が第一にあこがれる技である。そして又最も一般的、所がこのスウイングが、なか／＼思ふやうに行かぬもので、スキーを持つて居る人でこの事に氣を腐らさぬ人は殆どあるまい。下手なら下手なりに、上手なら上手なりに、誰でも日々のスウイングの失敗を繰返し

て居る。そして段々進境に向つて居るのではあるが、やはりこの時にも眞面目な研究者の必要なるは言を待たぬ。スウィングそのものに趣味を有する人々の努力は、決して顧みずにおくべきでない。一人でも多くこの行に賛すべきであらう。實際、我々が練習場に行つても、我々がスウィングに對する愛好心少い爲か、スウィングにスキーをこなし得る素質を欠く所ある爲かは知らぬけれども、練習中知らず／＼研究等はそつちのけに、テレマークをやるにしても何をやるにしても、失敗したら一寸やつただけでそのまゝにしてしまつて、直ぐに別の技に移り、或はスタンディングスキーをやる。そして愈々歸る頃になつて、今更先刻の自分の意氣地なさを恥する次第である。又他方面から見ると、この時の研究苦心等は我々にしても、上達の後に未熟者をコーチする上に、非常な効果を有して居る。即ち熟練者は一方にはこの場合、リーダーとしての初心者指導法をも充分考へなければならぬ。リーダーの半言一句が初心者の技をして、直ちに隔斷の差を生ぜしめ得ることは少くない。スウィングの研究は大にすればスラロームの研究であつて、この際殊にスラロームについて考へなければならぬことがある。それは競技として採用する時のスラロームに就いてである。雪質に應じて、スラロームをなすスロープは如何なる程度の傾斜にすべきか。旗の立て方は如何。若

しタイムを以て優劣を定めんとする時は、この方法を如何にして正確に且つ簡便にすべきか。昨シーズンに行はれた全國スキー選手権大會のスラロームの競技に出場せられた人々は直ちに氣の付く事と思ふ。之がよく研究せられたならば、スラロームの競技なるものも、もつと權威あるものとなり、又その審判方法も一層容易となるであらう。

最後に登山法。スキー使用の登山、之は非常に大きな範圍に亘つて居て、その研究も困難ではあるが、之は我國に於ても大部深く考へた人が多い。私如き者が今更力説するまでもない。要するにスキー登山は十二月初旬より五月末に至るまで、充分なる享樂期間を有して居るのであるから、この長期間内に種々の變化だけでも、極めて興味深いものがある。快走を目的とするスキー家にしても、山そのものをスキーによつて味はんとする山男に取つても、その道夫々に應じて、進むべき道はいくらでも啓き得るであらう。

以上は大体スキー術そのものについて、大体四方面の問題を搜したのであるが、更に之に附屬せる問題として、以上四つの方面の研究と共に平行して進んで行かねばならぬ事がある。それは云ふまでもなく、主としてスキー寫眞、及びスキー器具に就いての研究を擧げ得る。

スキー程、眼に映つた時好く、寫眞に於て悲觀せしめら

れるものはない。折角急なスロープで涙を流して滑つて寫眞を取つてもらつても、いざ現像して見るに平地で滑つて居るかの如く見える。雄大な冬の山岳美も、寫眞に撮る時になつて自信を以てなし得る人は少い。之について一層同好者の奮勵を希望して止まぬ。「少し無理かも知れぬが」實際我々がスキーで得た喜びを他人に分つには、この方法より外にないのであるから。

スキー器具も使用の目的によつて大部異つて居る、山スキー畑スキー等と簡單にやつつけるわけにいかぬ。山スキーといふても、雪質によつて長さのみについても七尺を可とし、或は三尺を可とする。ジャンピングスキーは重きを尊び、競走用スキーは軽くして細くこいふやうに、スキー製作に關しては、到底販賣者に一任する事等は不可能である。ビンディングにせよ、スキー蠟にせよ、一種類のもののみを以て、各人が満足する事は全然出来ない。又靴、杖に於ても同様である。製造者と我々との接近、及び互の努力は是非必要である。優秀な技術或はレコードは、必ず合理的のスキー、氣持のよい其他の器具が基礎になつて現はれて來るのである。

以上述べた所は、何れを先に、何れが重要と云ふ事もない。唯スキーに興味を以つ人が、(スキーを穿かぬ人にもこの研究問題を興へる事が出来る)夫々の好みに應じ、技術に

應じて進まるゝ事を望むのである。要するに、研究さか、問題云々といふて長々しく書いたのも一言すれば、スキーのより善き發達の爲の道程を示さうとしたに過ぎない。今後益々スキーに關する記事の多く投書せられて、こんな記事が忘れられてしまふ時期の早からんことを切望する。

(十二、七、十三)

山 岳

山岳第十七年第一號が去る七月發行せられた。内容は、神流川雜記(吉岡八二郎)南國の山(武田信)北上山地の旅(沼井鐵太郎)等である。高頭氏が山岳會設立以來の事情を記されてゐる。設立當時の意氣が、うかゞはれるが現今の窮狀は全く情けない。「しにせ」になるに「みえ」や「外聞」を氣にするものではあるが、吾々は往年日本の山岳界をリードせられた時を思ふに物足りない。同じ趣味者は會幹部に同情して出来るだけ實力に富んだ内容のある雜誌をだけでも作らねばならぬ。(かの生)

彙報抄録

雪崩發生時期及び時間に關する一報告

國有鐵道陸羽線に於ける一九二二年、一九二三年冬期に於ける雪崩の發生につきその時期と時間とにつき鳴子森林測候

所の調査に基き左表を得たり。

時間	三月	二月	一月	三月	合計
一					0
二					0
三			一		三
四		二			三
五		二			四
六	一	一			四
七					一
八					一
九					一
一〇					三
一一					〇
一二					三
一三					二
一四					九
一五					三
一六					三
一七					三
一八					一
一九					三
二〇					〇
二一					〇
二二					一
二三					〇
二四					〇
合計	一六	一七	五	九	四七

表中時間は氣象上用ひらるゝ二四時間制を採用せり。然してその記載例は第七時三十分は發生せるものは第七時の横に記入せり之に見るに夜間第二〇時より第三時に至る間に於ては全期間を通じ僅に一回の發生を見たるにすぎず、之に反し第一二時より第一九時に到る間に於て多く第一四

時に於て最多なるを知る。尙第三時より第六時に到る間に於て比較的多く發生せるを見る。本統計は鐵道沿線にして雪崩發生上特殊の原因を有するものなりと雖も、その斜面の多くは南西の樹木渺き山腹又は溪谷に在り、上記の事實を堆すに午後には發生する多數は底雪崩にして夜明に發生す

るものは氣温の最低時附近なるを以て表層雪崩なるべしと考へらる。本調査箇所は鐵道省に於て期間中一哩につき數名の監守人を置き例年雪崩多き地點には雪崩報告機(電機)を設置せりと云ふ。さればその發生時間に於ては比較的正確なるを信すべし。(加納一郎)

山頂の霧

三峯山の如き一千米内外の山岳上にありては霧は附近の地形よりするも他の山地と發生の事情を異にすべく山上の觀測者の觀て霧となすものは山麓より見れば雲たること多かるべく即ち低地盆地に於ける霧の氣流の沈降に依りて發生するに對し山上の霧は多く上昇氣流に依りて發生し下降氣流によりて消失すべし。山頂の地表の凸面をなすより考ふるも盆地と同様の原因によりて發生する場合は尠かるべしと思はる。尙霧發生中の風速より見るも五米内外を觀測することあるが如きは山上にて弱風ならんも低地にては可なり之の強き風なれば霧發生の原因を異にすべきは明なるが如し。(氣象彙報第一號二七頁)

◇ 會 告 ◇

昨年春、東京青年會館に公開せられた獨乙のスキーフイ

ルムは、アトチユニア諸君の血をわかしたものであつてさすがの天狗連も高鼻を折られ「もうスキーはやめた」とさへ云ふものが尠くなかつた。而しながら此の活動寫眞の影響は去るシーズンには著しくあらはれたことは冬スキー地に於ける新しい技術の進歩に見られるのである。爾來、該ヒルムは一二私的會合の席上に映寫せられた世にあらはれることなく、空しく所有者の庫中に一年有半を経過しその内容のみを傳へ聞きたる地方のアマチュアーをして長く焦感せしめたのであるが、愈近く各地に公開せらるゝ機運に向つたのである。然して茲に該ヒルムが本會主催の下に先づ北海道に於て公開せらるゝことになつたのは誠に嬉ばしい事と云はねばならぬ。眞のスキー家、尠くも讀者諸兄は、雪期のみのスキー家ではない筈である。乾いた大地をふんで尙吾々は天の雪を想ふのである。けだし此のフィルムが吾々の前に映寫せられることは、あだかも沙漠のオアシスである。雪原の焚火である。抑壓せられた滑降慾を灼熱するものである。九月ミ云へばもう北の山、高き山頂には雪姫の影を見る。此の價值ある映畫の公開は來るべきシーズンの序幕である。またホツカイドースキーランナーにとつては、御身等が去るシーズンに勝ち得たる榮冠に對する最高の饌である。

眞寫活動一斯基乙獨

製作會社。エルネマン。ツブ。クル

„Das Wunder des Schneeschuhs“

旬 下 月 九

す 公開に於て。の都市。其他。樽。小。札幌。

催 主

會 之 一 基 斯 之 山

定 價 金參拾錢

*前金御申込か、現金でなければお渡しいた
しません。

*御送金はなるべく振替にてお願致します。

*六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

*前金の切れた時には最後の分の包装にその
旨記します。次の御送金あるまで配本を見
合せます。

*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹
介、縁故の有無にかはらず雑誌の代價は
頂きます。

大正十二年八月三十日印刷
大正十二年九月一日發行

(毎月一回一日發行)

編輯者 赤 松

印刷兼 發行者 長 谷 川

札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

札幌市北六條西六丁目

發行所 山とスキーの會

振替口座水樽八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Klubo

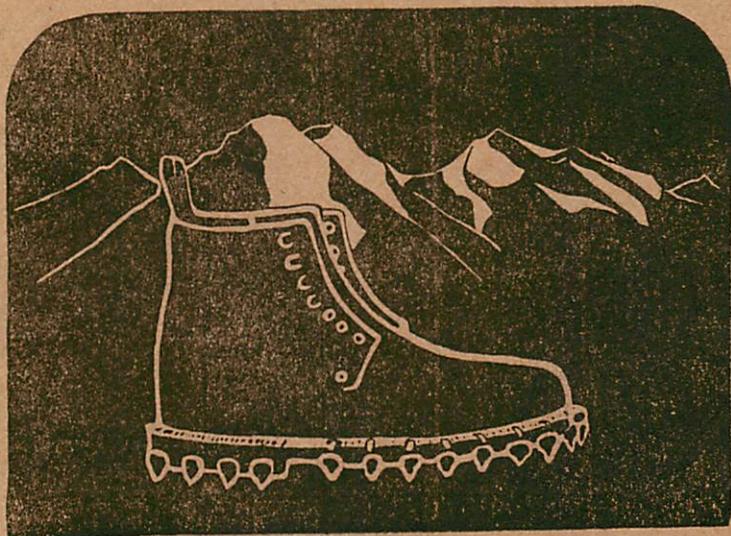
No. 28. Septembro 1928. Sapporo, Japanujo.

大正十二年七月三十一日第三種郵便物認可
大正十二年八月三十一日印刷納本
大正十二年九月一日發行

(每月發行一回)

山とスキー 第二十九號

定價金參拾錢



登山靴とスキー靴

.....

東京市本郷區四丁目角

太田屋靴店

電話小石川四七一二番

振替東京六一二七番